

11月<< 2008年12月 >>01月

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

2008.12/15 (Mon)

★杉の伐採見学



T Sウッドハウス協同組合が、毎年実施している伐採ツアーに参加しました。

12月13日(土)14日(日)の一泊二日の行程で、杉の木による家づくりの、様々な段階を見ることができました。

一日目は杉の家の完成形であるモデルハウスの見学と、製材所の見学。

築後12年を経過したモデルハウスは、杉が落ち着いた色合いに変化して歴史を感じさせます。

外壁の杉板は、初めの黄色い色がチャコールグレーの渋い色に変わっています。

この状態で安定して、何十年と持ちこたえるのです。

室内は杉の板が銚色に変化して、新築当初のけばけばしさがなくなって、よい雰囲気。

時間が経つほど味わいが深くなる、これが自然素材の素晴らしいところ。

15年、20年と年数が経つほどモデルハウスとしての価値はさらに増すことでしょう。

ハウスメーカーのモデルハウスは、建てたときがいちばん良くて、だんだん価値が下がっていく、

3年から5年で建て替えられるのと対照的です。



製材所では丸太から角材や板材に製材する行程、それを栈積みして、時間をかけて天然乾燥しているところを見て廻りました。建築現場に届けられるまでに、大変な手間と時間がかかっているのがよく分かります。

二日目は、杉の家の始まりである伐採の現場を見学。天に向かってそびえ立つ大きな杉の木を、見学者が見守る前で切り倒します。倒す方向をねらい定め、チェーンソーで切り込みを入れ、矢（木のくさび）を打ち込んでいきます。大きな地響きを立てて倒れたとき、杉の木が衰れでかわいそうに思われます。年輪の数は102まで数えることができました。



この木の命は絶たれたのですが、本当の使命はこれから始まるのです。この場で約3ヶ月、枝葉をつけたまま置かれて葉枯らし乾燥され、その後、貯木場から製材所に運ばれ、角材や板材に製材されて、栈積み乾燥されます。そして、住宅の建材として柱や梁、床板などに使われて、第2の命が始まるのです。この伐採された木の衰れさを思うとき、この木で作られた家は、この木が生きてきた100年という年数を持たさなければ、木に申し訳ない。木の家づくりは、木の命をいただくこと、という思いが生まれてきます。



木の家に住んでみて、非常に心地よく感じるのは、
肌触りの良さ、やさしい香り、自然の木目、柔らかい音の響き、など五感に感じる部分だけで
なく、
木の命をいただいている、というところにも心地よさの秘密があるのかもしれない。